中村俊定文庫
文庫 18
412

天日升暄花ハかく酔ふこと
天与也酒に天下ハ七酔に花も
天寄七酔逅得て花酒にも
天寄也酔　天下夜寄ハ秋借覧

路を立しる騎乃ちからを知
事するかと驕りて人乃心城
禮は薄氷を身に臨ふに去し
井上氏乃家城健として暁雲
園中あるし儉を知りて真

書きも祈よ清の人々全はあ〳〵免
く夏は清し昏は宴会晨ハ
着る乃志あ生姓城つるよ
神乃御恵深く我〳〵我
門を勢ふ湘恩城剛業んと

花より百葉城多〳〵移庵〳〵
いひ拾ひ城こまさ〳〵爭宗通
十〳〵乃鉢よ〳〵の物志を来
聖廟をさけ集れた刈むあ
十あ〳〵頼ひ侍る心人を負

さしも面白き為と書こ度
一巻乃基を尤と
時寛暦十巳の春三月

晴日
高橋

高橋
文庫

奉納百韻

此花の香を吹う白鳥
礼する放ち立ち
今乃何やすくんを長閑
才角同へを先ひ
雲吹ハ秋を蔭を靡くらん
影よ深し日を深き歳

曉雲圖青雞
独唫

早稲田大学
図書

雲の波往ふる深む身を
ちりつゝ清き滝へやり水
新樹の地へ移されて世を度り
響くあるゝ深めく雷
云名付かりてくんを身を
神聖宮を忘てはうん〳〵
恐るゝ多の笠は固唫れ
ゆるゝ休し張し表跡

慍り解風を祝れる滝乃糸
山居の暦一葉散り
玉附もさかゝる玉沢を別る
いろ半早し上の弓張
詩俺く今ハ衣を飄へし
氏あし氏を産を深めうん
國栖人を花の沈同ふ上童
空を生ゝくハ紙て仕ゝ蔦

はしまつ猿の絵とかなり
京地より伝来又ぬむ京
風くれ初をとゝ楽む夏座敷
夏よりうれ石仮橋子
素鼠もけてやりき化粧回
粉れを門の室加う脚
懸めしめとうとハをさう
たうひめくを待うるまう技

毒ある事と云れいる富士
度乃乃雪ちくく深しを段段
月乃雪ちくく深しを段段
橋うへ夏ほとうたまり
色乃ちくても見よ如れ
男れ石粉うく指ハ設ふし
板屋貝拾ふをりハ茶屋うく
初うめ火初うよ漕出るみり

父よ似て屈漢を穿て拙俗し
山よりもまさる呼られし恩
吹度よ協蝶の夏を形きた
ちなよ拂よ見蚤の塵
暑さうて屋もむ夏水の苦
大將よ敬小鹿侵乃相
母衣くいよ字よ情宵益母草
張書よ出め紙のたまね

花の人の乃そ月ハよ形れを
灯火れ花芳るを晨朝
厚氷蹠ハ棺よ花絵と
一ちり形ち移る和紙
菜子乃門ハ毒まきなるを
働よるこうて海棠
去筆きのよハ昔ついに枝葉
まよ生れて咎き先生

碁の敵おそへんつてうの多
瀬を隔てくゝし代は肥る石
枝打戸を風のあけ行八重津
尾よ志とうしてる土へ蛇蠅
舎釈して出るの味ハ蛍の結
文久さんハ角本榜なん
詩物憂といひて蒼うう
臧第よ来てうりくすゝる

ゆの月望ハ寒るとも終夜
那風炉ハ炉して用ゆもよ
百芝の裕は茨のもとして
上へふき伊達は雲雨乃綾
海へうとたゝも蛇蛙行如物
扇て捷むさゝゆ一曲
すゝくとトアハ撈も落葉
名とれし樹はハ名跡紙棟へ

立の月の雪ハ岩根よりとけ、
風も立やゝ近き川音
十六夜の月ハ山の端退き
そも彩まつる免雲天地
神ゝめて立花も御岩根
波よ紋ありうゝ下櫛こゝ
毎つも咲ものの郎も書ハ花
本の芽人めも出て張ハし

嘶りの郎ゝうつる斧の音
稲荷社ゝもさまくゝと化す
姿ゝ石すき岩のゆうも遠掛
漏りめを便りよりし芽て青
徐の色ハ深紅めゝ家乃墨小神
老乃うゝもよつゆゝ立うし
蝶ゝ飛ハ付くゝも蝶ゝ飛
咲たのむゝ岩蝶と西亜

楽せんとてひのもとの数繰く
月さへうつる氷柱氷鼎
風よ舞雪伶人の眺入を
却て舞袖の長き人の外
影を捨うつ投る袖きうん
光り恋おのの世をてかせん
常盤もついよとりとり

捨て捨て捨る屋乃面
只よくくと元月物り神
欲うとう取も刈和合楽
うさと忘て程よ叶屋り
恵くあるり神の長人ん
麻もせんせ荷し物種

寺内の法ろよ十字色の
匂と匂微と

世よ苔ろ大わ梅や梅乃花　而咲蕊　涼石

沛名彩やくるもろ花ろき梅　錦花翁　隆志

神風ハすふそち梅の御ゝ形　香稲庵　竿秋

神松乃德ハ孤ろ千よ梅のを　千載堂　丈石

吹や右近のろ博の梅日和　冨鈴房　宋屋

春ろてあけハうゝ自立神　雪沙翁　普求

梅白ゝ牛程ろゝ神の春　後扇翁　八百彦

さく梅よちをの松も弟式　風雲斗　風狀

枝ろの男らゝうや梅乃花　夫更舎　蘭石

咲梅や松ハ不彩の御雪見　荷葉庵　鹿雄

門生雲圃至彩を抜き　素雄

ちらちら雪ハ大ふりやけの梅小字

百員

独唫

末乃君ゑ柳そ風ゑ拳乃花
礼紅乃ゑ鳩と　なる　鷹
用ゑ炉ゑ行ゑ乃立ゑ多
庵へゑふらふ　水乃一軸
ゑ川徳　緯ゑ艶ゑく秋の色
恥飼ハ清く　青り吼へゆく

宵周八月の松明
燈のいとなはれ傳とむ酌
勤行乃内よ湯風呂ハ客や焼
そそらよ云ひ高さ如意輪
物り神り明あり地よハすもあり
茅乃留考我 拂り清 貪
空ゝ人知り生め蟬の初付ゑ
茅漬と生ハ下戸も家と付

ひゆうよ流ーさ真む翠簾風
立出る時 鈴い居まち月
宗長坊よ彩菊る廉明草
藏ての知行 猪いりめ
紫乃い水色り深り
焚礼乃博へ 離も 出紅
ゑさり女ていく裳ひるん
蔵乃衣り引ひそむ山

雲より入まれるかけも雲なきく
秋のうつろふいろ〳〵哉
初めの作りめ人を咎そもろ
古端にとは端の作下結
嫁の屋よりあるて割る雷花塚
養生訓 鶯夫鳥 蛙 山雀
鶯鳴よやらう蓋をあけもん
そとそとも 別〳〵 盆

踏んだ足情遠ふて柳子後
ゆくまでゆう象も孫も
老て我年こそ誘はれ
山乃天窓を極る雲乃ち
扇の張月はお入をうらく
涼しさ乃ほ乃門れと
清水風あるそそる裏撫拭
白粉焼も素思 裏ゆく

拙られ拙ら拙を又ふれ
化する勢急乃上よ勢急
毋いうよ文ふ年呼出彦
芭蕉乃やれる風玲のおと
乃よの月年ひまかく松い松
潦ふも塵乃うふ雨
琴乃喩隅田川てハ郭鳥
山内朱ふ呼庭高

揚拙乃牛房も夜乃乃ひ
羽二重揚れよ新ふる卓
ちれふを添む人ふ造ふも
風味を知ハ風鳥乃嘴
拙仏よ桃ひふ川ふふれ
添乳乃蹄を名服治り牢ふ
行列の中長刀ハ郭ふく
ふ乃文武ふひく下草

山疫ニ推ニ合ハ如ル教風
浴室ニ入ル事ニ圖法師
国仏ニ施行の座乃窓ヨ蟻
小ヲ叶ヘ為ニ大鐵乃恥
才を勝ム人ニ化トハの色ヲ
吸ケて如ル吹ヲ紅粉
ヲ白ク塗乃ヲ事の者ヨ消滅
月ヨ感情牧帳弱ヲ為ニ星

雲の景兜巾乃上ヨ付テ
額ニ波乃ヲ寄ル八眉
吹れ事ヲ新ヨ浦人五韻絲
色ハ黒ク是ハ真書
学ヲ室ヨ入ル物ヲハ
行ヒ事ヲ美ニ変ヒテ
彼れても礼ハ破れ為ル
糟漬ヨ砕ヨ妖

白雪ふる雪ハ深てもたゝ
廓の曉ふ[illegible]
秋院ふ七十又日月ハ
頃ふ[illegible]て[illegible]
自ゆきハ[illegible]
やくたいふ[illegible]
[illegible]人の[illegible]
仁ん御ふ[illegible]

八京の一ツふ[illegible]
[illegible]
髮[illegible]
光も加勢[illegible]
琴の[illegible]
[illegible]て[illegible]
出家[illegible]
[illegible]葬[illegible]

姫乃宮を踏也伊勢乃乃すゝ
笠脱てよゝ昼もうけくし
春よおりて杖つゝせゝき老母を
地ハえ来も深し通天
月と友語らし碧月のな
ゝひ出の丁僕ひさまけく高
白雲よ嗤れて高乃掃海も
己よ累ゝらくして牧瑞

善提ゝ入乃き物八千ゝ
徐よハ行と水中姫氏國
初冠妹の乳人林しゝを
清水あへて宮ゝ乃くく
いとおゝ乃中よゝ乃ひ花ん
言の葉此来永さゝを花ん

右乃百句ハを芳きゝ話立乃

橘印を清し白こ乃中彼是
ゆうつるゝ事未だ九歩よりん
尾を膏含く巳杯と如し　我
十宗道の古校を求て家らの
秀逸とを約拙吟う流く
神意をあらさるを印杯を
尤よ歌して　一無我
信仰の力

而咲翁評

三百点　ちさちよこつも若さ如意輪
〃　分を拾む人とハ紙ハの色うを
〃　浴室へ入ゝ　圖法師
四百〃　菩提も入るさ切ハ千うゝ
五百〃　琴の喩陽田川てハうやてる
　　秀峯評

三百点　花盛如ていを幾りゝん

、初めハ化ちめ人を食をもる
、糟湯よ酔よ酔よの妖
四百、根神の羽ゑ地よりあり
五百、化するもの乃上よ狐ちる

香稻唐評

百点　琴の音よ田ゑと雲ちる下ゑ鋪
百七十、涼しきもるく後の川ちく
百八十五、袴うつくしきいゑ、哉

千載堂評

三百点　芭蕉の宵ちる風俗乃ちく
、吸付て知ル吸口よ紅粉

富鈴房評

百卅点　かゝる云葉を別し九色
百五十、潦ゑも芸乃うさ
百九十、袴ようつくしきいゑ哉
二百卅、図てゑを折きる数拉

二百五十文　たゝちよこいもあるき如之婦
、　誘ふ凡あるとき考ふる裏樣私
三百文　浴室へ入まゝ蜀法師
、　三喜拉ても入るき物八千ふる
三百四、　糟漬より酔よりは妖
三百五十、　涼乳乃海と名派治り守ふ
四百、　化する結あの上より移ちる

三百文　屋くたいすよ歴くの醫者
、　白歯して結ハ深ても生ふし
、　山帰来ふゝ呼ふた妄
四百、　化するちゑの上より移る
五百、　浴室より入まゝ蜀法師
風雲齋評
二百文　初冠妹の乳人林ーふ

二百七十五、養生飛鳶を山鳥

、白服ハ[illegible]る[illegible]も鯨と

三百、芭蕉のやうの風流乃言

、琴の[illegible]田舎をのせる下座敷

夫更舎評

二百卒六　白犬ゑ嘴れて言乃掃溜も

、初ハ[illegible]人を喰ふもの

三百、[illegible]くし[illegible]ハ真書

、茶漬ハ下戸も[illegible]を付

、[illegible]ちゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

三百卒、[illegible]指を文[illegible]

四百、[illegible]

五百、風味を[illegible]ハ風鳥の[illegible]

、[illegible]

六百、[illegible]人をハ[illegible]ハ[illegible]

七百、[illegible]ひ[illegible]ゑ恨[illegible]

荷葉庵評

三百点　初冠味乃乳人ちゝかり

〃　臧てのゝ紅行淡いうめし

〃　髮うらうらも心ちあり淡紬

四百、　糟湯よ砕ふはとの妖

〃　雲の峯塊巾乃上よ裳て

五百、　ふうちいつよ象も鯨を

六百、　振袖うねちうた花よもあり

右前句一綴の百員有略之

花乃咲きゝ日乃ゝ乃ゝ

鄙き夢よ生き都の花を羨く

夏神を花ちよ加茂川よ流ん

ゝあ門ゝく井ゝ氏よ書ゝて毎ふ

湯ゝを寒ゝ乃ゝ乃ゝ年を重ゝ

親子草の時支月日ふる
如月の頃三月しもまつ乃ふる
かぜを出ふ迷ひ聖廟は
給ふく御園を出て宝殿後
しく義を思ふ神の
恵を深のふ無恩を新まん
ふ和歌いくまつやはたあれを
学ふ所を博ふ者は物別の
たふふる言の葉を徳く一巻と
刻まん納きんと思ふふ語ふる

神国いよいよ高き地に生まれ合はせ
たりしことを和歌の道を学ぶ家に厳
しき稽古なりとて世を隔てたる人をこそあれ

曉雲閣書籍

長和所村
山下力弥著也

洛陽二條之住
京雲舎里鶴